

～バス・タクシー・トラック・鉄道・航空・船舶等、運輸事業者向け
業務用アルコール検査器（検知器）の最新の導入実績と傾向について～

飲酒運転根絶および交通事故ゼロ社会に向けて安全システム機器を開発する東海電子株式会社（本社：静岡県富士市 代表：杉本 一成）は、このたび、バス、タクシー、トラック、鉄道、航空、船舶等、運輸事業者向けに、2003年以降16年に渡って提供してきた業務用アルコール検査器（検知器）について、機種ごと、業種ごと等、最新の導入傾向をご紹介します。

1) 業務用アルコール検査器（検知器）の開発の背景

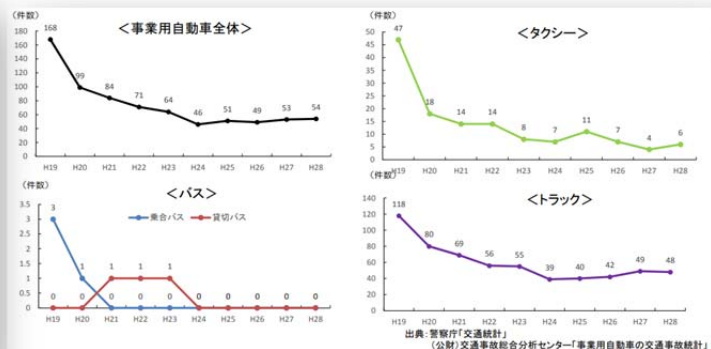
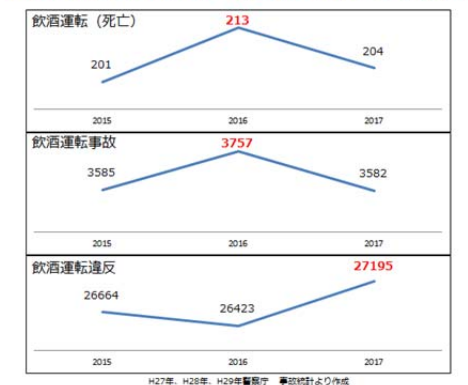
当社は、約18年前、東名高速におけるトラックの追突事故や、飲酒ドライバーの現行犯逮捕事案をきっかけに、「高度に安全であるべき運輸事業者に特化した、記録型のアルコール検査器（検知器）」の開発に着手しました。そして2003年、PCやカメラを使って本人であることを確実に確認できる初代ALC-PROを完成させ市場投入しました。その後、プリンタ型、携帯電話接続型等、点呼や安全管理に貢献できる高度管理型の飲酒検査器を次々市場投入、2006年には福岡の飲酒運転事故をきっかけに、ついに飲酒をしているとエンジンがかからない「アルコールインターロック」の市場投入も果たしました。

2011年 国土交通省は、『飲酒運転ゼロ』を達成すべく、点呼におけるアルコール検知器の使用を義務づける法改正を施行しました。また、道路交通法においても飲酒運転の厳罰化が進み、一般ドライバー、プロドライバー、ともに飲酒運転は終息に向かうかに思えました。

しかしながら、飲酒運転は、ここ数年、下げ止まりや、前年比増の傾向が表れています。一般ドライバーの飲酒運転は、2度の厳罰化を経てもなお、「撲滅」とはほど遠く、年間200件以上の飲酒運転による死亡事故があります。昨年にいたっては、とうとう違反者数が増加に転じてしまいました。

また、一般ドライバーだけではなく、プロドライバーによる飲酒運転も、下げ止まりから、増加に転じている兆候が見られます。特に、トラック業界においては、「アルコール検知器の義務化」以後、3年連続で増加しました。

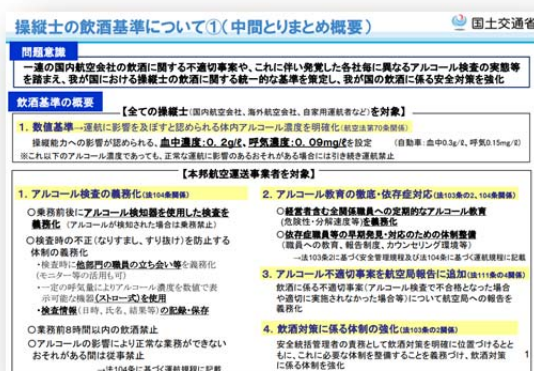
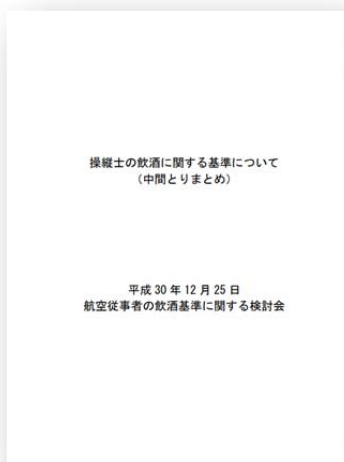
ここ数年、飲酒運転は、下げ止まりから、前年比増へ



2) 2018年 運輸安全業界におけるアルコール検査器の役割

2018年、突如、航空事業における飲酒問題が立て続けに発生しました。今や身近な交通手段となった国内航空便、インバウンド観光により活況を呈す海外便。そんな中、航空は、高度に究極までに絶対的な安全体制が施されていると、社会の誰もが思っていたところ、乗客や社会を不安にさせるような飲酒事案が相次ぎました。いざ国土交通省が航空事業者の実態を調査をしてみると、航空業界は、2011年以降アルコールチェックが義務化されて厳しい安全管理体制を敷いている自動車運送事業と比べると、想像以上にルールや基準が曖昧であることがわかりました。

対策を講じる検討会もすでに何度も行われ、日本における航空業界の飲酒関連法がいま改正されようとしています。



中間とりまとめ 概要

<http://www.mlit.go.jp/common/001266520.pdf>

こういった中、アルコール検査器（検知器）の役割があらためてクローズアップされています。特に、当社は、これまで幾度となく「誤検知」や「誤作動」等いわれの無い指摘を受けたり、「身代わり・なりすまし」問題に悩まされながら、性能やシステムに改良を加え続け、免許証リーダーやIT点呼に代表されるような「運輸事業者向けに特化したアルコール検査器（検知器）」を極限まで追求して参りました。

この度、この16年間の、機種ごとの実績や、業種ごとの実績をご紹介することによって、運輸安全業界の企業様の実効性の高いシステム、実効性のある人員体制構築に貢献できれば幸いです。詳細は、別紙『バス、タクシー、トラック、鉄道、航空、船舶等 運輸業界向け業務用アルコール検査器（検知器）の実績と傾向 2018年版』をご確認ください。

★★本件に関するお問い合わせ先、資料請求先★★

東海電子株式会社

〒190-0012 東京都立川市曙町 2-34-13 オリピック第3ビル 203号室

TEL : 042-526-0905 / FAX : 042-526-0906

e-mail : info@tokai-denshi.co.jp

URL : <http://www.tokai-denshi.co.jp>

2018

バス・タクシー・トラック・鉄道・航空・船舶等運輸事業者向け

業務用アルコール検査器（検知器）に関する

業種ごと、機種ごとの導入実績と傾向について



Since 2003

東海電子株式会社 Tokai-Denshi inc

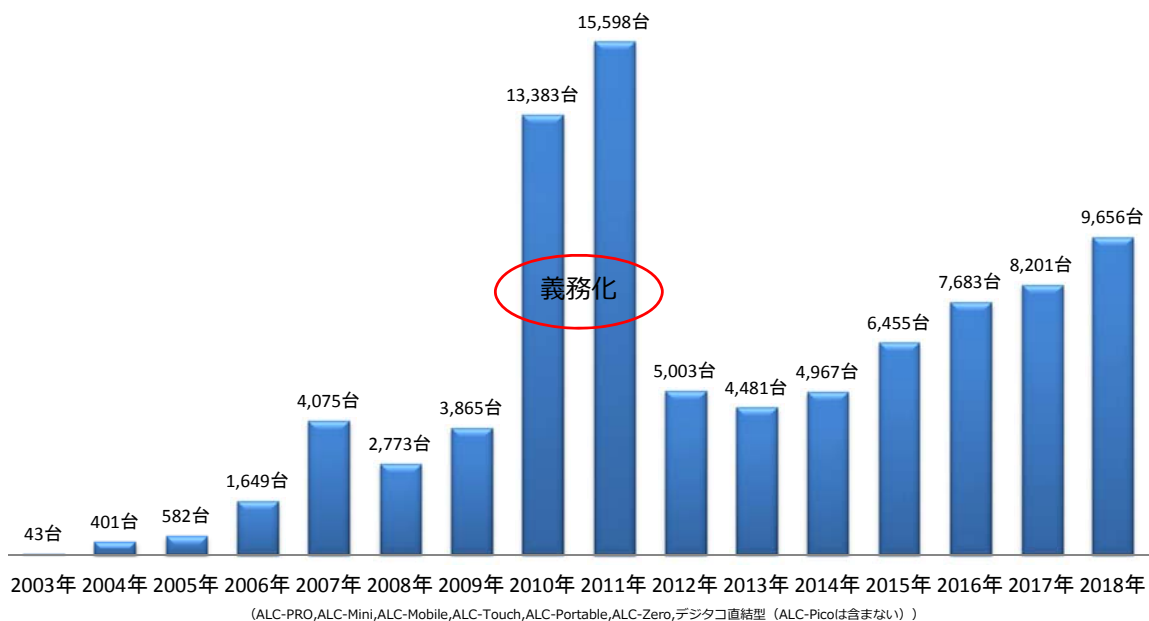
2019-1-29

適用

本文書における統計はすべて、東海電子株式会社の自社調べによるものである。本文書は、事業者が、アルコール検査器（検知器）を法人として、管理用用途で導入する際に、導入目的に応じた適切な機種選択を助けることを意図している。

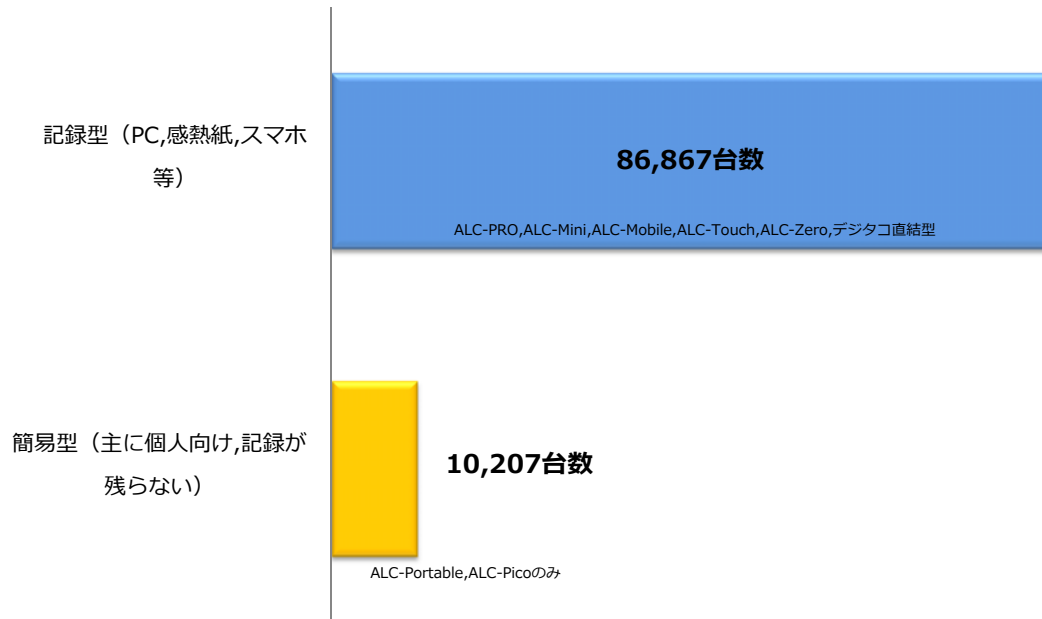
また、一般消費者におかれても、個人向けのアルコール検査器（検知器）と、事業者向けのアルコール検査器（検知器）との差異について、興味を持ち、知見を広めていただく手助けとされたい。一部集計において、便宜上、機種を、簡易型、設置型等と称しているが、この定義は自社によるものである。

東海電子 業務用アルコール検査器 2003年以降 累計 88,815台



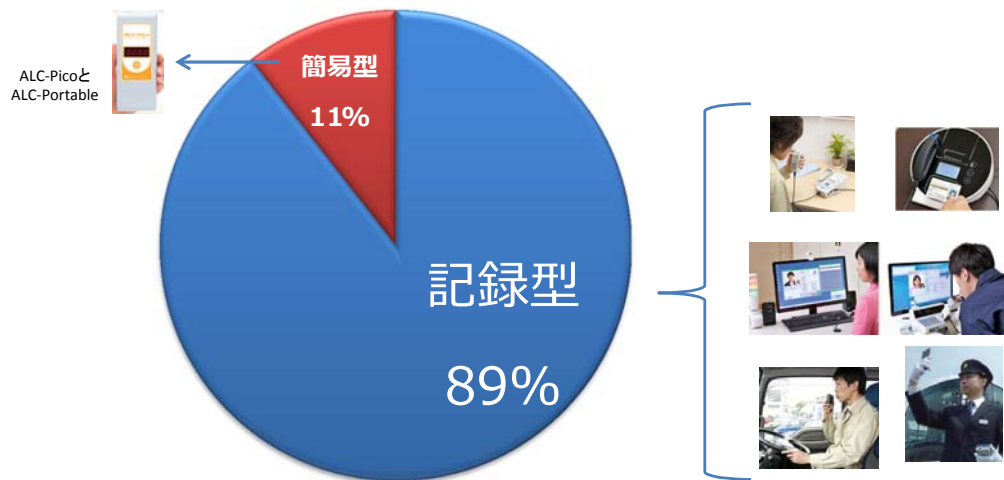
当社は、2003年以降、バス、タクシー、トラック、産廃事業者、鉄道、航空、船舶、その他一般企業へ法人向けに特化したアルコール検査器を出荷している。2018年12月時点で、累計 88,815台。(簡易型、個人使用のALC-Picoを除いた合計)

東海電子 アルコール検査器 出荷内訳



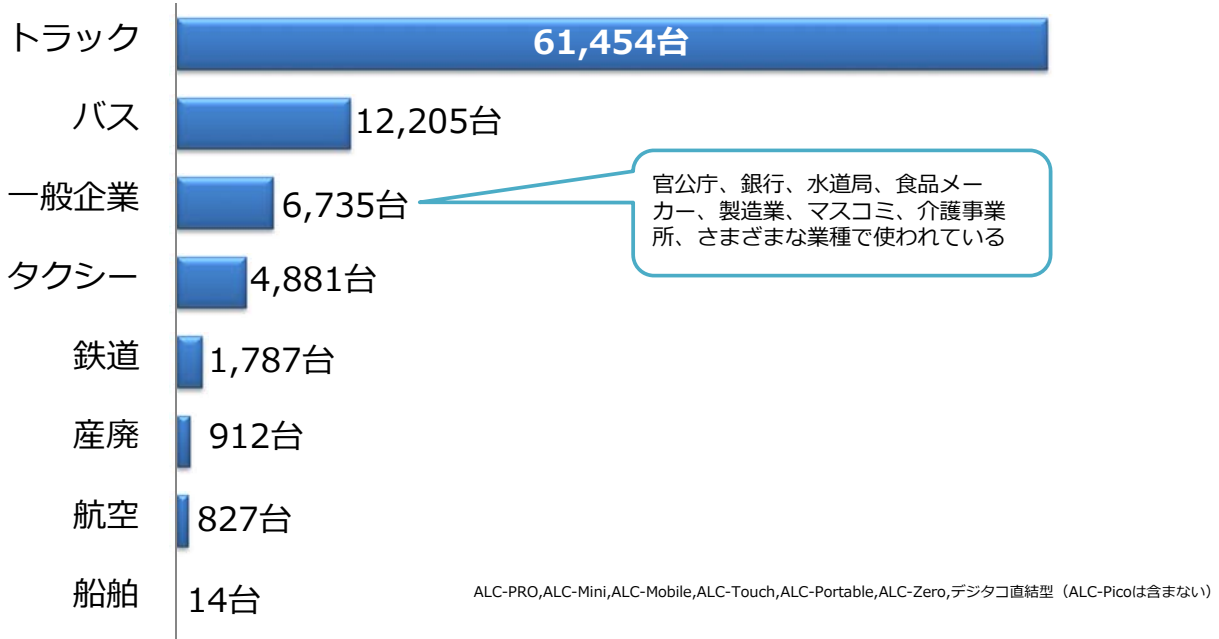
2012年頃、個人向けに簡易型のアルコール検査器を発売した。旅客会社において全員配布を行うために購入されるケースがあったが、記録が残らないことから、また、その後のメンテナンス依頼が少ないことから、使用・運用の実態は不明であり、あまり数量は伸びていない。

ほぼ9割が、記録型アルコール検査器



2012年頃、個人向けに簡易型のアルコール検査器を発売した。旅客事業者によって、全員配布を行うために購入されるケースがあったが、散発的であり、その後、メンテナンス依頼が少ないことから、業務用としての実績は低調である。管理用途の実効性、抑止効果から、**当社の実績では記録型が主流である。**

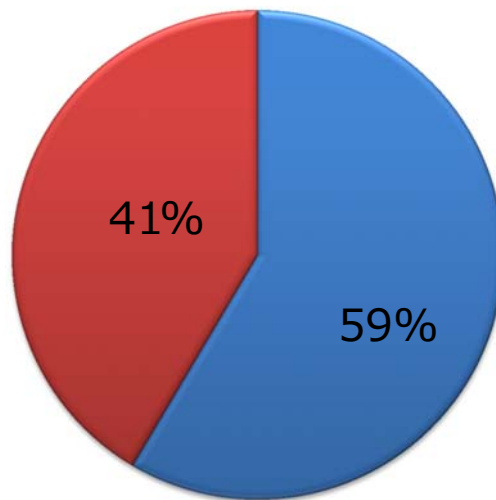
販売先の業種内訳



上記は、設置型・スマホタイプを含めた実績である。事業者数の裾野の広さから、やはりトラック企業の実績が高い。次いで、バスであるが、ここ数年、官公庁や銀行、車両を使う一般企業、マイカー通勤の多い地方の製造メーカー等、非運輸市場において業種が多岐にわたっている。**結果的には、タクシーよりも一般企業の導入数の方が多い結果となっていることが、昨今の特徴である。**

出荷内訳 対面点呼用、電話点呼用

■ 設置・固定型アルコール検査器 ■ 遠隔地型アルコール検査器

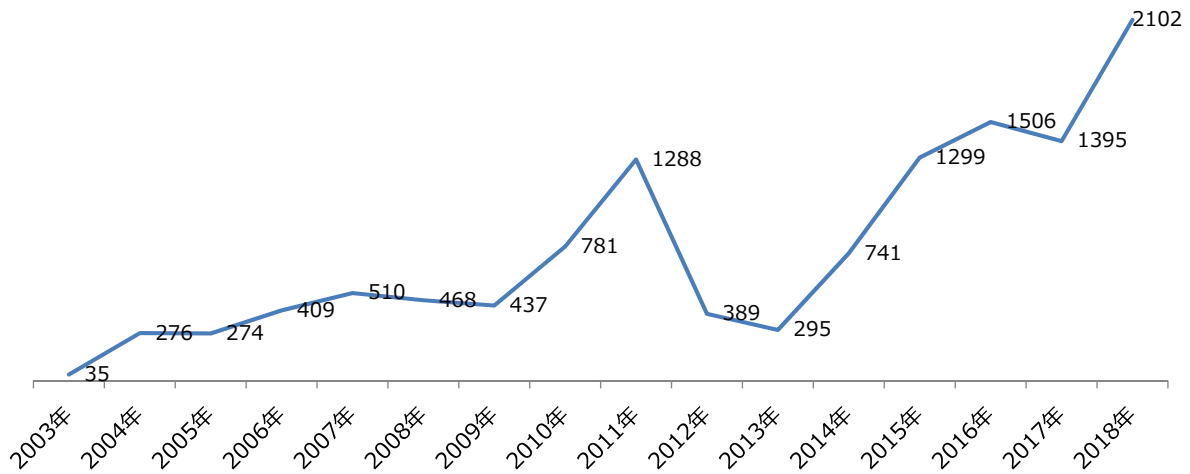


ALC-PRO,ALC-Mini,ALC-Mobile,ALC-Touch,ALC-Zero,デジタコ直結型 (ALC-Picoは含まない)

業務用アルコール検査器 ALCシリーズは、対面点呼やIT点呼用の記録式設置型と、遠隔地記録式（車載含む）に分けられる。**アルコール検査の運用初期は事務所管理型がまず導入され、その後、遠隔地型が導入されるケースが多く見られる。**どちらかを、というより、結果的には両方を導入し、場面に応じて使い分けているのが実態である。

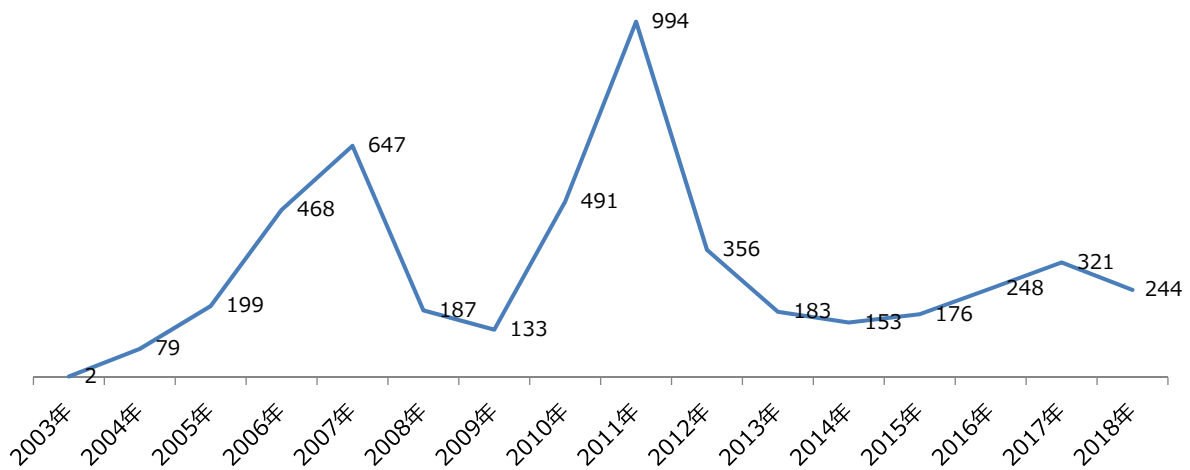
運輸業界ごと 検知器導入 推移

バス、伸び率高い



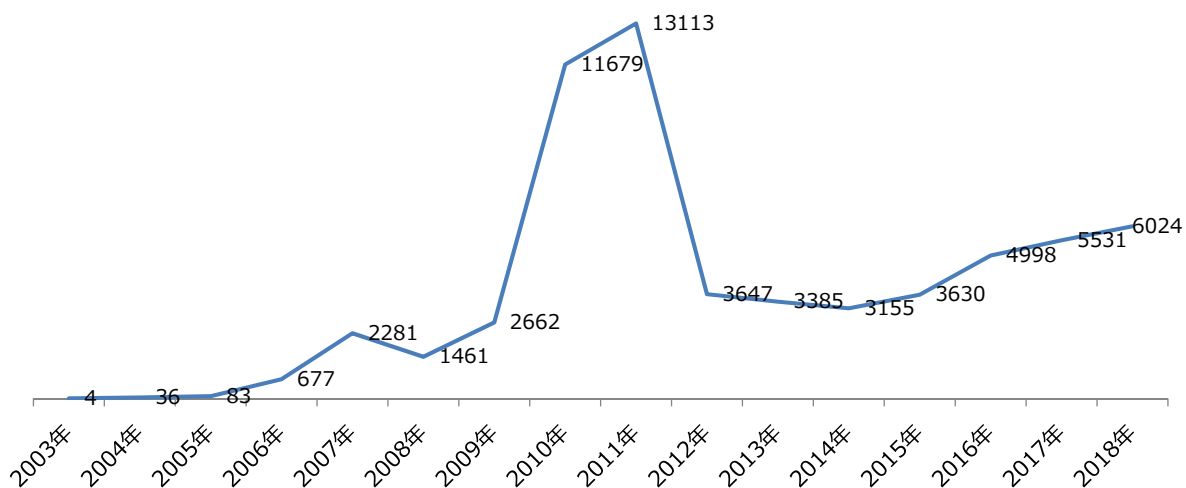
運輸業界ごと 検知器導入 推移

タクシー、ほぼ行き渡ったか？



運輸業界ごと 検知器導入 推移

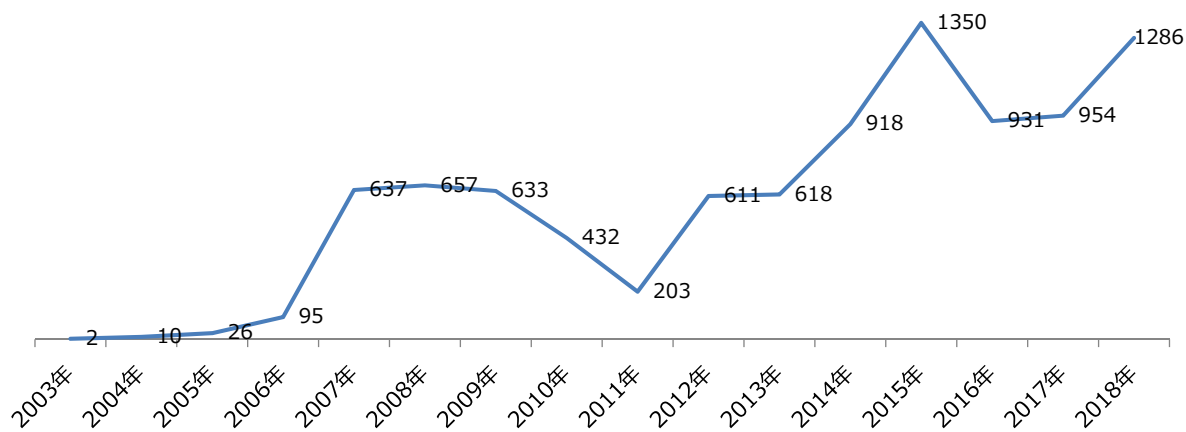
トラック産廃、堅調な伸び



運輸業界ごと 検知器導入 推移

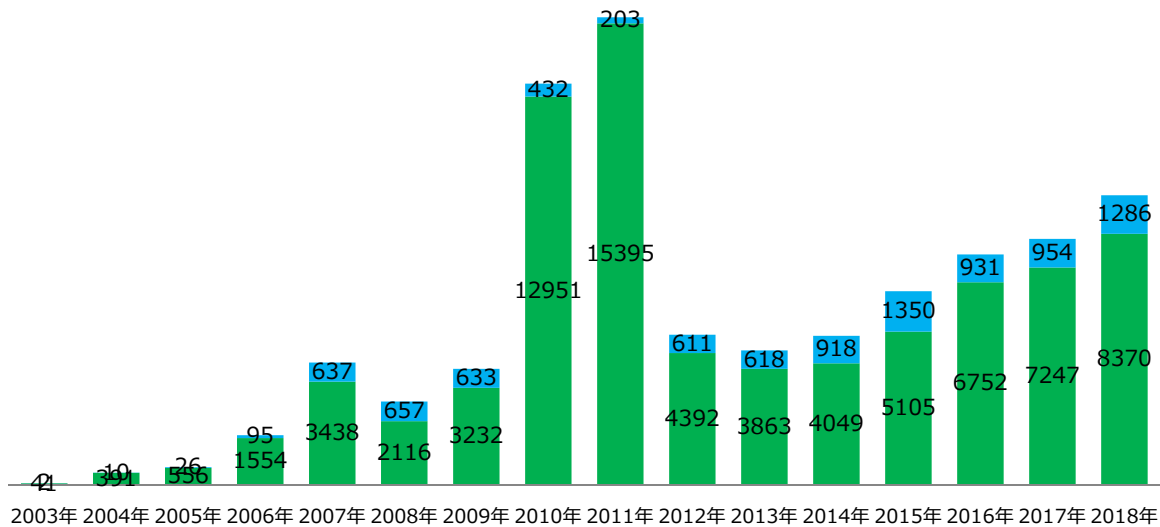
鉄道・船舶・航空・一般企業

とくに一般企業は市場拡大傾向



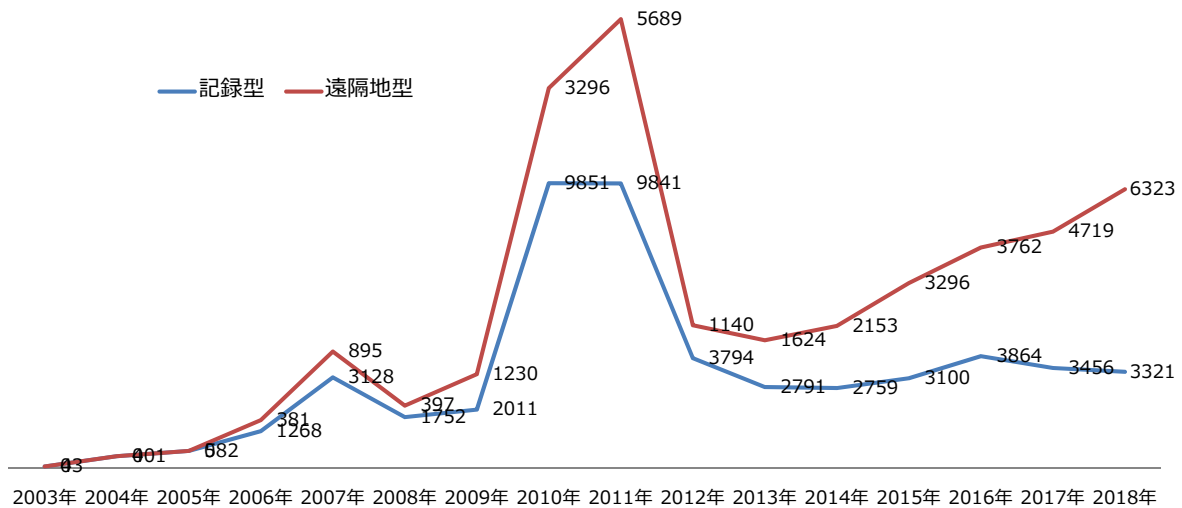
運輸業界ごと アルコール検査器導入推移

■ 緑ナンバー ■ 鉄道・航空・船舶他・一般企業



アルコール検知器の使用義務法令とは関係のない業種であるにもかかわらず、一般企業の伸びが顕著である。特定の業種の傾向はみられないが、浅く広く浸透していている印象。企業社会全般において、飲酒運転防止観点ではなく、**「健康管理・飲酒管理」意識の高まりとも推察される。**

設置型アルコール検査器と、遠隔地型（車載型）アルコール検査器

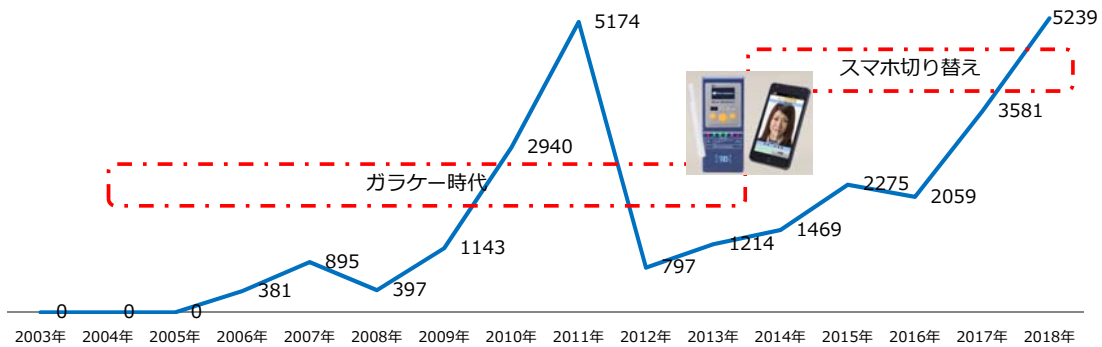


遠隔地型は、車両数や従業員数見合いで導入されるケースが多い。設置型は、基本、いち営業所に一台の考えとなり、遠隔地型ほどの伸びはないが、上下の波はなく、実績は落ち着いてきている。

遠隔地型アルコール検査器

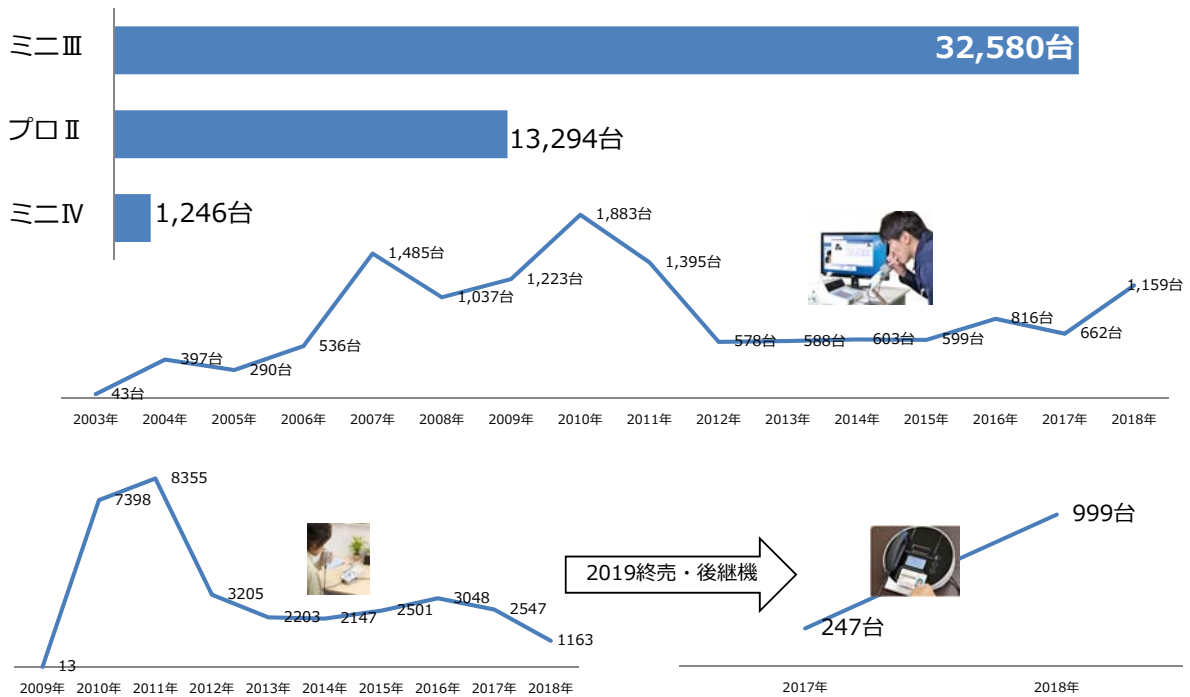


【スマホ接続型アルコール検査器 年度ごと実績】



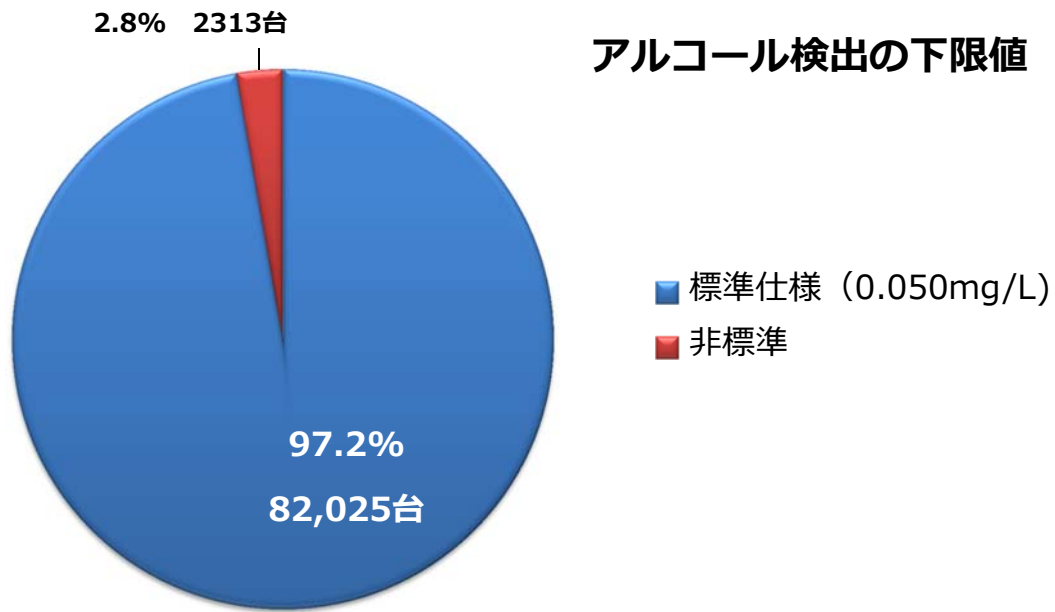
遠隔地型では、**スマホ（昔はガラケー）接続型の実績が圧倒的に多い**。デジタコに直に接続するアルコール検知器も近年好調。アルコールインターロックは、小康・伸び悩み。

記録型・事務所設置型アルコール検査器



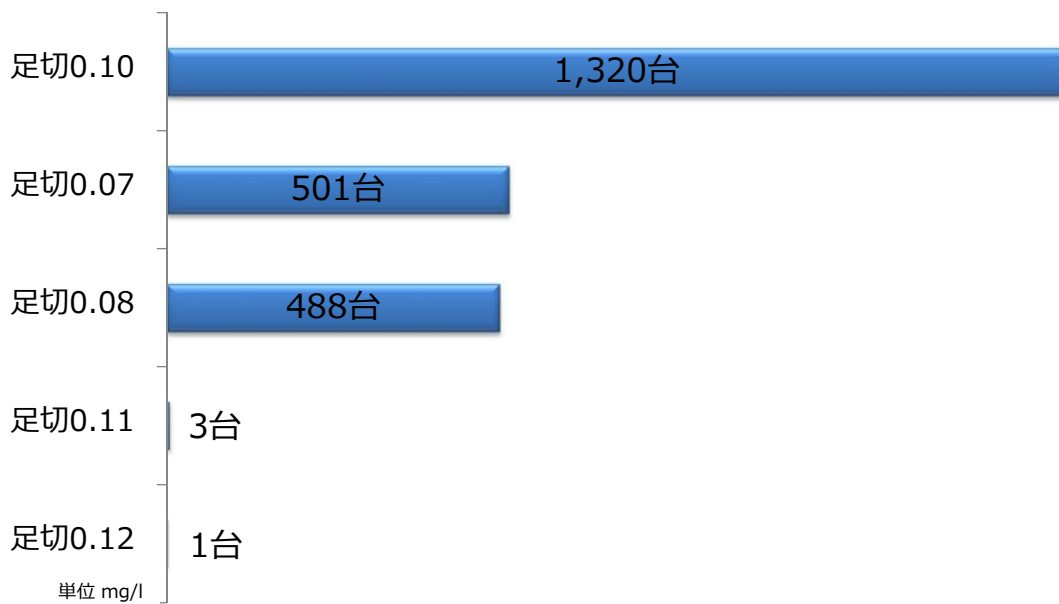
ミニⅢは、エントリー価格（8万台）。最も出荷実績が高い。PC標準タイプは30万円前後で、ミニⅢの3倍だが、**身代わり防止力が強い**ためか、管理強化志向の場合、こちらが選ばれている。ミニⅢは、終売が決まり、免許証リーダー内蔵かつプリンタ型、**ミニⅣが好調**。

アルコール検査器 標準仕様について



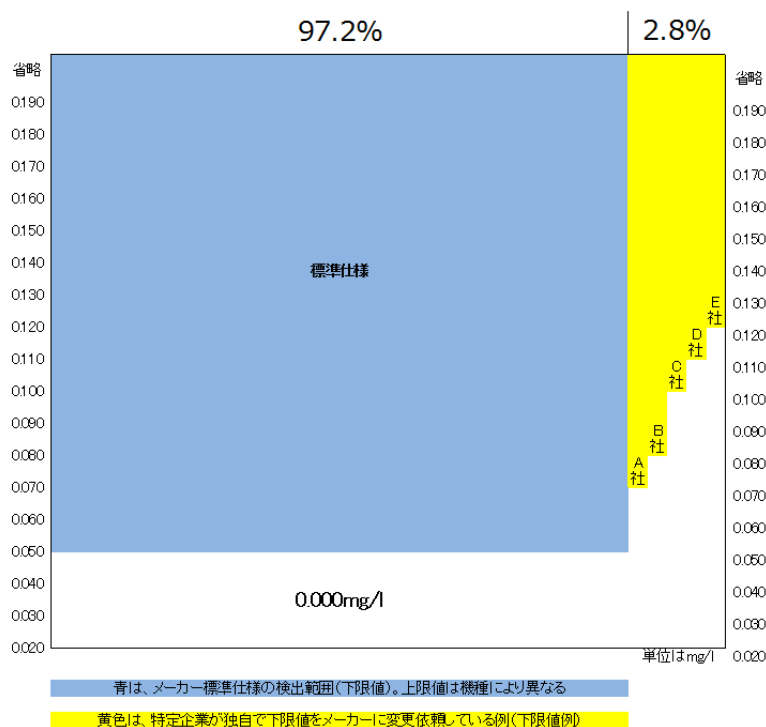
当社が法人へ出荷したアルコール検査器のうち、当社の**標準製品スペック (0.050mg/l下限値)**として出荷したのは**97.2%**。
 事業者の諸事情により、特注品扱いで**下限値を変更して**出荷したことがある (2.8%)。

特別仕様で稼働しているアルコール検査器の台数



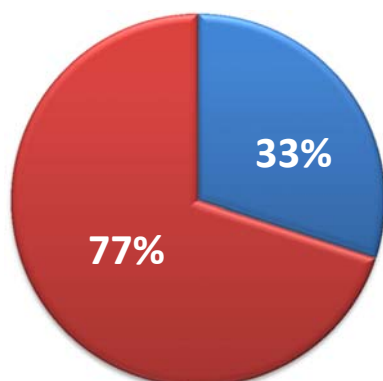
顧客側から、メーカー標準ではない「下限値」が求められる背景・事情としては、過去に使用していた特定機種仕様が「0.07や0.11」であった、従業員や労働組合と、すでにこの数値 = 飲酒基準であると合意されているケースが多くあった。従い、もし後付けで0.050mg/lを下限値とすると、「話が違う」「これまでより厳しい」等、労使関係に不和や不都合の懸念があったため、上記の仕様が現存する。

参考：0.000の定義は、相対的なものである点について



参考：簡易型アルコール検査器 従業員配布ケーススタディ (簡易型・セルフ型・個人向け・ハンディタイプの使用実態)

■ 校正が行われた ■ 校正してない(・・・心配)



	使用した？	日時は？
データ記録式	分かる	わかる
簡易型	回数でわかる (回数カウント機能がない場合、わからない)	わからない

簡易型を個人(従業員に持たせる)という購入パターンが多くみられるが、以下の課題がみられる。

- ✓ 校正が実施されていないケースが7割。**精度保持が心配である。**
- ✓ 家で飲まない人にも配布するので、校正時**「新品・未開封」のまま回収される。**費用対効果は？
- ✓ 誰が回収するか、使用頻度を確認するかしないか等々、**形骸化をふせぐ運用ルールがあいまい**
- ✓ 回収しても、記録が残らないタイプなので、実態分析にならない。